

イギリスのアジア系イスラーム女子中等学校の生徒と 成人の生活実態

—— タワー・ハムレッツのマルベリー女子中等学校生徒とコベントリの成人を中心に ——

佐久間 孝正

1. はじめに

筆者は、2007年4月、立教大学社会学部より半年ほど研究休暇をいただき、うち3カ月、イギリスに滞在する機会を得た。その間、イギリスのマイノリティ集住地区であるイースト・エンドの移民労働者の生徒が集中する中等学校2校を参与観察する機会に恵まれた。

1校は、イースト・エンドのタワー・ハムレッツにあるセントポールズウェイ・コミュニティ・スクール (St. Paul's Way Community School) であり、バングラデシュ系の多い共学の公立中学校である。本校には、3カ月の滞在期間中、移民労働者の生徒の初期受け入れクラスを自由に訪問する許可を得て、主に受け入れの特徴を教員の対応と学校の制度面に着目して、帰国後出版した2007年の拙著で紹介した¹⁾。

もう一方の学校は、同じくタワー・ハムレッツにある、マルベリー女子学校 (Mulberry School for Girls) という公立の女子中等学校である。ここでは一部の教員と図書館のスタッフの協力を得て、図書館を利用する女子生徒にアンケート調査を実施した。期日は、07年7月である。このアンケートから得られた結果に関しては、データが少なかったこともあり、これまで公表を控えてきた。

しかしイギリスのマイノリティの児童・生徒に対する関心が高い割に、直接、子どもの意識調査

に基づく研究は極めて少ない。調査してすでに3年経過したが、今回、社会学部研究紀要『応用社会学』への執筆のチャンスが与えられたので、公表することにした。

当初は、対象となった生徒に親用の調査票も家庭に持ち帰り、親の調査も試みる予定であったが、すでに学校が休みに近づいていたためこれは断念せざるを得なかった。ただし、滞在中研究室を利用させていただいた、コベントリのウォーリック大学で友人を通してイスラーム系の成人に調査する機会があったので、地域は異なるが、後半ではこのデータも紹介し、イギリスで生活するイスラーム系住民の意識を探ってみたい。

データの扱いについて一言お断りしておきたい。調査の総数が、女子学生、成人ともに24人（合計48人）と少なく、1人の動向でもパーセントで表すと4.2%とバイアスがかかるため、当初は実数だけを記そうと思ったが、こうした統計分析では全体の傾向をパーセントで比較する向きも強いので、必要に応じてパーセントも併記することにした。またデータの集計は、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程の曹慶鎬さんにしていただいた。かなり前に、貴重な時間を割いて協力いただいたのに、公表が延び延びになってしまったことをお詫びし、この公表をもってお礼に代えさせていただくことにしたい。

2. 近年のタワー・ハムレッツの状況

イギリスのマイノリティの集住地域は変化が激しいので、初めにタワー・ハムレッツの最近の動きを紹介しておく。筆者が滞在していた07年も含め、このところ3~4年のタワー・ハムレッツの大きな変化は、難民や東欧圏からの人の移動が増えたことである。マイノリティが集中する所は、来たばかりの新しいマイノリティにも住みやすいようで、このところタワー・ハムレッツには、アフリカのソマリアやコンゴからの難民や東欧圏からのEUの人が急増している²⁾。

タワー・ハムレッツは、昔から移民労働者の集中する地域として有名な所である。17世紀には、フランスのプロテスタントであるユグノーが大挙して住みついているし、19世紀にはアイルランド系やポーランド、ロシアのユダヤ人が、そして第2次世界大戦中は、マルタやキプロス系住民が相次いで移民して来た所である³⁾。アイルランドの居住者に関しては、エンゲルスの古典的な名著『イギリスにおける労働者階級の状態』が、当地の様子を克明に分析しており、今なお当時の状況を知る最良の書である。

アイルランド系やユダヤ系移住者が、ほかに移動するとそのあとに、20世紀後半からバングラデシュ系住民が住み着いている。かれらがこの地域に集住するのは、ドックを中心に現地の人をつきたがらない3 K労働が集中していたこと、さらに古いタイプの公営住宅が多いことである。

そのようなところからタワー・ハムレッツは、昔も今もロンドンでもっとも貧しい地域の一つである。例えば給食の利用率をみても、ロンドンの多くの地域のなかでもっとも高い。かつまたこの地域は、以前の調査でも4人以上の子どもをもっている大家族が、どの地域よりも多い。これはアジア系が、一般に子どもの数が多いことに対応している。この傾向は、今回の調査でも確認できた。

現在イギリスは、旧植民地住民の移動の制限に乗り出しているが、家族員数が多いところから、

移民を制限してもしばらくは街のアジア化は、依然として進行するとみられている。また、移民が多いところからロンドンのその他の地区と比較して、失業者や職に就いていても不安定な半熟練労働者が多い。

このようにタワー・ハムレッツは、ロンドンのなかでも典型的な移民の町であり、それゆえ家庭内では、英語以外の言葉話を話している者が多い。そのため、子どもたちのなかにも英語を流暢に話せない者も多い。特にバングラディッシュのコミュニティ内部では、15歳の子どもの4人に3人までがベンガル語を話し、そのため教育にも重要な支障をきたしている。その一端もまた、本調査で確認できる。

3. マルベリー女子中等学校の現状

今回のマルベリー女子中等学校の生徒の実態に入る前に、学校全般に関して説明しておく。この学校は、女子のための公立中等学校で、11歳から19歳までの少女1400名が学ぶ大規模校である(幼児部も含む)。芸術とメディアのスペシャリスト・スクールでもある。スペシャリスト・スクールというのは、労働党時代に特色ある学校作りがすすめられ、その分野でのユニーク性が評価されれば重点的に予算を獲得することができることから、労働党時代に学校の特化が大いに進んだ。

現在、イングランドの4209校の公立中等学校の3分の2の67%までがスペシャリスト・スクールといわれており、種類には、美術、ビジネス、エンジニアリング、言語、数学、コンピューター、音楽、科学、スポーツ、技術などがあり、2つを組み合わせたスペシャリスト・スクールも認められている⁴⁾。本校もまた芸術とメディアの2つの分野を重視しているわけである。

また本校は、コミュニティ・スクールでもある。コミュニティ・スクールとは、イギリスの公立校の形態の1つで、地域の学校理事会が運営の実権を握り、校長や教員の選考を行い、かつ学校が就

学年齢児童生徒の学校であると同時に、義務教育を終えた地域の成人の間でも、日中なら空き教室を、夕方以降は、その他の教室も含め地域住民に学校施設が開放され、地域の生涯学習施設としても利用される形態の学校のことである。

学校が創設されたのは1963年、当時、イースト・エンドの代表的居住者は、前述したようにユダヤ人であり、学校にもユダヤ系の生徒が多かった。しかし、かれらが経済的に成功し郊外に移住した後は、アジア系の生徒が多くなり、現在は、東欧圏のロマも含め難民も多く、多くの言語の話者をもつ多言語学校である。

名称が、マルベリー女子中等学校になったのは1984年で、もともこの地域は、18世紀にユグノーが大陸から住み着き、かれらが織物工業を興すために蚕を育てたところからとられている。それゆえ、こうした古くからの多民族化された地区を反映して教育でもマルチ・レイシャル・エデュケーションが重視されている。

ナショナル・カリキュラムの導入によって、数学・英語・科学がコア科目とされ、さらに歴史・地理・音楽・美術・外国語・体育・技術そして宗教が基礎科目とされたが、それらが一定の比率で教授されている。またこの地域が、バン格拉ディッシュ系の住民が多いところから、ベンガル語が重視され、さらにこの地域が、もとはユグノーが住んでいたところから、外国語としてはフランス語が重視されている。

日本の学校の標準10教科システムと比較すると、学年ごとにかなり多くの科目の選択が可能である。理由は、この学校には、200名のシックス・フォームの生徒がいることとも関係している。幼児学級も併設されており、毎年180名が許可されている。学校の施設には、科学教室、体操場、音楽室、料理教室、織物教室、コンピューター室、写真室などの設備もある。

また、中等教育修了資格 (General Certificate of Secondary Education, 以下 GCSE と略) や大学入学資格となる一般教育資格 (General Certifi-

cate of Education, 通称 GCE と略される) の A レベルも取得できる。資格には、GCSE や A レベルばかりでなく、全国一般職業資格 (General National Vocational Qualifications, GNVQ と略) や全国職業資格 (National Vocational Qualifications, NVQ と略) に相当する資格もある。シックス・フォームの学生には、必ずしも A レベルの取得を目指した学生ばかりではなく、こうした職業上の資格を目指す学生も多い。

4. 生徒の調査結果の項目別動向

性別、出生地、滞在歴

調査の対象となった性別は、女子学校の図書室職員の協力によるので24人全員女子である。

生まれは、祖国バングラデシュと答えたのは3人 (12.5%) だけで、残り21人 (87.5%) 全員が、イギリスと答えている。大半の生徒が2世以下の世代である。バングラデシュ生まれの3人にしてもイギリスの滞在期間は、16年が2人。18年が1人であるから、すべて1歳前後でイギリスに来ている。大半が人間としての社会化をイギリスで経験しているといえる。イギリスでの滞在期間も、全員が16年から19年と長期滞在である。

兄弟数、同居者数

兄弟数は、「自分だけ」と答えたものは1人で、もっとも多いのが5人以上の17人 (70.8%)、ついで3人の4人 (16.7%)、4人の2人 (8.3%) であり、依然としてバングラデシュ系では二世、三世の世代になっても兄弟数の多いのが特徴である。イギリスでも少子化が問題になっているが、5人以上の兄弟が70.8%と3分の2を超えることは、バングラデシュ系の特徴でもある。

兄弟数の多さは、当然、家族員数の多さともなって表れ、家族員数のもっとも多いのが、6~8人の12人 (50.0%)、ついで5人の5人 (20.8%)、以下9~10人が3人 (12.5%)、11人以上1人 (4.2%)、4人も1人 (4.2%) であり、残り

は3人が1人、「回答なし」1人であった。

イギリスでは、しばしばインド亜大陸系の家族員数の多さとそれに見合った住宅不足が指摘されるが、6~8人の12家族(50.0%)なり9人以上の4家族(16.7%)なりは、イギリスでは大家族となり、子どもが帰宅後、自分のための学習用個室をもつことは難しいだろう。限られた今回の調査でも家族員数の多さが、学習環境を圧迫している様子が見えてくる。

家族形態

祖父母と「一緒に否か」に関しては、「一緒に」が4人、「いない」が20人(83.3%)であり、祖父母と「一緒にない」者が多い。祖父母と共同でないにもかかわらず家族員数が多いことは、兄弟数が多いこと、さらにほかの親族との共同生活者も多いと思われる。今回は、家族内にほかの知人や親族がいるか否かは聞かなかったけれど、研究書などをみると多いことが指摘されている。

家庭内言語

さてこうした家族のなかで兄弟どうして話す言語は、英語が11人(45.8%)、母語が4人(16.7%)、ミックスが9人(37.5%)である。今回対象になった生徒のほとんどがイギリス生まれであることを思うと、兄弟どうしても英語だけで話す者が半分以下であることは意外にも思われるが、兄弟数が多いことを思えば、妥当な数字かもしれない。かれらのなかでは、しばしば年長、年少の姉妹と弟妹では、15歳や20歳離れることは珍しくなく、姉妹は、イギリスで義務教育までしか教育を受けなかったが、弟妹はイギリスの大学卒というのはよくある。弟妹は、イギリスで生まれ、生活し、英語も堪能で、イギリスの学校制度にも慣れているからである。

その意味ではむしろ、母語だけで話す生徒が4人もおり、さらにミックスも含めると、半分以上が兄弟どうしても日常会話に母語を使用していることの方が重要だろう。この背景には、今も述べ

た兄弟数が多く、年長の姉妹には母語が便利ということに加えて、イギリスでは、旧植民地出身者の母語に関し、学校が教授し、かつ資格も取れるシステムになっていることが大きい。

親との意思疎通言語

一方、同じ家族内コミュニケーションでも、これが親(含む家庭内親族)との会話になると、20人(83.3%)までが母語である。英語は3人(12.5%)だけであり、母語と英語のミックスが1人(4.2%)である。親との会話すら母語であるから祖父母との会話は、祖父母と同居している4人全員が母語であった。調査の対象になった生徒の大半が、イギリスで生まれている。それだけに親の滞在期間は、20年以上が多いと思われるが、子どもとの会話は母語がほとんどである。

このことから、英語に関し親との会話を通して重要な抽象言語や概念を習得する機会は、きわめて限定されているといえる。子どもの学力向上には、親の学習への参加が重要であるが、英語が不自由である以上、宿題や学校の勉強をみてやることは難しいだろう。バングラデシュ系の子どもが、教育環境において不利な状況に置かれていることは、これからも推測できる。

祖国訪問の頻度

祖国訪問のチャンスは、「よく行く」が8人(33.3%)、「ほとんど行かない」が15人(62.5%)、「回答なし」が1人である。20年以上もイギリスで生活しながら3人に1人はよく祖国を訪問しており、祖国とのきずなの深さが分かる。しかし3人に2人は、ほとんど訪問しないことをみると、重要な知人の多くもイギリスに来ているのだろうか。ただ3人に1人が依然としてよく祖国を訪問する現状は、本校が母語のベンガル語をなぜ重視しているかをも物語る。それは、親子との会話や子どもの教育にとって母語が重要という教育上の理由だけではなく、祖国を訪問するときの実際上の理由からでもある。

イギリスでの満足度

今回の調査でもっとも印象に残ったことの1つは、生徒たちのイギリスでの生活に対する満足度が非常に高いことである。24人中21人(87.5%)までが「満足」しており、「どちらともいえない」は2人だけで、「不満」と答えた者がいない。その他の1人は、「回答なし」である。質問は、イギリスでの生活となっているが、生徒である限り学園生活が評価の基本になるだろう。わずかに「どちらともいえない」と答えた者はいるものの、大半が満足している。

たしかに本校の98%までが、バングラデシュ系の生徒である。民族学校というわけではないが、イースト・エンドのこの周辺は、バングラデシュ系の巨大な集住地として有名である。インド系やパキスタン系すら少ない。インド系やパキスタン系は、同じロンドンでもヒースロー空港に近いウエスト・エンドの方に住んでいる。結果としてイースト・エンドは、同じインド亜大陸でもバングラデシュ系の集住地である。本校はいわば、公立の民族学校のような色彩を帯びている。そのため同じ宗教・習慣の生徒どうしになり、居心地がいいことも関係していよう。民族的な差によるいじめや宗教上の差による差別の少ないことが、彼女たちの満足感の背後にある。

また祖国バングラデシュでは、いまだに女子の中学校の就学率がそれほど高くはないことも、イギリスの学校評価には関係していよう。イギリス社会での登校・下校時における人種差別への積極的な対応策や図書館、体育館等の施設、あるいはハラール・ミールの提供や祈祷の部屋の確保など、さまざまな文化的配慮にも満足感に関係している。

日本でかれらに近い外国人として、居住年数から在日韓国・朝鮮人や日系南米人を連想してもおかしくない。しかしかれらとでは、生活上はともかく学校教育上の満足度は、かなり異なるのではないだろうか。

日本の民族学校の生徒との比較の視点

旧植民地国出身者ということでは、イギリスのバングラデシュ系と日本の在日韓国・朝鮮人とは、いろいろ共通性をもっている。しかし、長年日本に滞在している在日韓国・朝鮮人にしても、本名を名のっていないなかったり、母語を学校教育の正課として受講することができないなど、基本的な点でイギリスと日本の教育制度は異なる。在日韓国・朝鮮人のなかには、民族学校に通っている者も多いが、そのかれらですら、これだけの満足感を示すかとなると疑問である。

日系南米人の場合は、かれらのなかにも20年近く滞在している者も増えつつあるが、日本の学校への満足度となると、そこでは依然として不登校や不就学が問題とされる状況にある。母語や母文化の学習も日本の学校では困難である。日本語学習のシステムもまだ不十分であり、地域間格差も大きい。

ほかに、帰化でもしない限り国籍が取得できないこと、参政権等の市民権も得られないことなど、基本的な点でイギリスのバングラデシュ系と異なる。イギリスでは公立学校が、多文化教育を採用していることも、生徒の満足度に大きくかわるだろう⁵⁾。また生徒と同じ出身国の教員がどれほど採用されているかも、ロール・モデルの上で重要である。

日本の教員採用では、3世、4世の時代になっても外国人のままでは、教諭としてではなく常勤講師としての採用である。日系南米人の教育界での採用はさらに制限されており、多くは、国際学級などでの日本語と母語との補助教員や相談員としての勤務である⁶⁾。これは日系南米人などには、日本での教員資格がなかったり、日本の大学教育を修了している者がまだ少ないことにもよるが、マルベリー女子中等学校には、バングラデシュ系の教員が多数採用されている。それも単なる教員だけではなく、地方教育当局(日本の地域の教育委員会に相当)内での要職や学校長などの管理職についている者も多い。こうしたことが、両国の

子どもの満足度にも大きく関係しているように思われる。

信仰

宗教は、1人の「回答なし」を除いて23人(95.8%)全員がイスラームである。バングラデシュは、イスラームの国ではあるが、子どももイスラームを信じている。本校には、祈りの部屋(praying room)が別に設けられているが、生徒の多くも熱心な信者となると、学校に祈りの部屋があることも彼女たちの宗教や文化への配慮を物語るものとして安心させる機能を果たすだろう。また教科のなかには、12のナショナル・カリキュラム科目のほかに、イスラーム文化やイスラーム教の授業もあり、祖国さながらの宗教や文化を学ぶことも学校への満足度を高める要因になると思われる。

学歴

彼女たちの教育レベル(学歴)は、中等学校が1人、シックス・フォームが19人(79.2%)、継続教育が3人、「回答なし」が1人である。回答してくれた多くの生徒は、17歳から18歳までのシックス・フォームの生徒ということになる。1人GCSE前の中等学校の生徒と、18歳から19歳の継続教育の生徒が若干名含まれている。シックス・フォームの生徒は、これからAレベルを取得して高等教育に進学する者や職業上の資格を目指す者である。彼女たちの大半が、イギリスの生活に満足しているのは、このような教育機関に進学できたこともあるだろう。祖国では女子にこれほどの教育はとても望めない。

マルベリー女子中等学校は、ホワイトチャペル一帯のバングラデシュ系コミュニティで女子の中等教育機関としてはもとより、シックス・フォームとしても大変人気のある学校である。この一帯には、バングラデシュ系の女子のシングルスクールがないばかりか、シックス・フォームを併置している学校そのものも少ない。毎年数百人の

待ち組を残していることから、この学校の生徒は、それだけ恵まれており、逆に本校の生徒でバングラデシュ系のイギリスの学校の満足度を測ることもできない。

国籍

国籍は、1人の「回答なし」以外、23人(95.8%)全員がイギリス国籍を取得している。これまでイギリスでは、両親がイギリスに住んでおり子どもがイギリスで生まれれば、イギリス国籍が与えられる。大半がイギリス国籍取得者であることは、子どもにとって生活の中心はイギリスにあると思われる。

また二重国籍についても聞いてみたが、該当者は4人であり、それはイギリスとバングラデシュ国籍であった。17人(70.8%)はイギリス国籍のみと答えており、彼女たちにとり自分はエスニックな出自はバングラデシュであっても、地位や身分はイギリス人なのだとの思いが強いに違いない。重国籍に関し「回答なし」は3人で、うち1人は国籍に関しても「回答なし」だが、残りの2人はイギリス国籍取得者なので、重国籍の意味がわからなかった可能性もある。

家庭の文化資本

移民家庭とは限らないが、家庭がもつ教育環境を知る手だてとして、家庭の文化資本という考えがある。この内容には、蔵書や購読紙、さらには絵や美術品、骨董品等のコレクションも含まれるし、さらには日常的な政治、経済、国際関係、宗教、文化等の話題も含まれる。今回のような小さな調査では、細部までうかがうことは不可能なので、ここではあえて蔵書に注目することにした。

家庭内の蔵書に関し、「いっぱいある」と答えた者が11人(45.8%)、「そこそこある」が5人(20.8%)、「わずかしかない」が7人(29.2%)、「回答なし」1人である。「いっぱいある」と答えた者が多いともいえるが、むしろ「わずかしかない」や「そこそこ」の者の方が多いことが重要で

あろう。何をもって「いっぱいある」「わずかしかない」と判断したかには、主観的な差がつきまとうがここでは問わないことにする。

シックス・フォームは前述したように、よりよい職業上の資格や高等教育に進学するための資格を得る所である。このような教育機関に進学することは、家庭内の協力を前提にする。蔵書や雑誌が少ない家庭で、彼女たちの進学を決意させたものは何だったのだろうか。

購読新聞

新聞を「よくとる」者は6人(25.0%)、「ときどき」が15人(62.5%)、「ぜんぜんとっていない」者2人、「回答なし」1人である。新聞に関しては、「毎日とっている」よりも「ときどき」の方が倍以上も多いが、これはイギリスに宅配制度のないことも関係している。恐らく白人の間でも、「ときどき」の方が多くなるのではないだろうか。「ぜんぜん新聞をとっていない」家庭もあり、このような家庭の文化背景の子どもたちは、イギリスの学校のシステムやナショナル・テストの全国動向などは、どのようにして入手するのだろうか。またその家庭がどのような特徴をもつか、さらなる調査が必要である。

希望の結婚の形態

最後は、将来の結婚について聞いたものである。インド亜大陸には、古くから両親や親族の決めるアレンジド・マリッジがある。バングラデシュでも広くみられる結婚の形態である。本人の意志がまったく無視されるときは、ブラインド・マリッジ(blind marriage)やフォースド・マリッジ(forced marriage)ともいわれる。この種の結婚は、祖国から配偶者を迎える戦略に使われるときもある。そのため結婚は、イギリスで社会化された子どもと、祖国の文化を重んずる親との間で意見の齟齬を生む代表的なものともなる。しばしば親たちが祖国とのつながりを重視し、適齢期の子ども(本人)にどんな配偶者を連れてこようとし

ているのか、子どもながらも疑心暗鬼の状態に置かれるからである。

特にこの種の結婚の犠牲者は女子で、なかには祖国から身内の男性の入国が厳しいなかで若い労働力を招き寄せる目的で縁組されることも少なくない。20代から30代前半までのインド亜大陸出身の女子の自殺率の高さは、この種の結婚の犠牲者を示すバロメーターともいわれるほどである。フォースド・マリッジの多くは、離婚しているといわれるが、なかなかなくなっているはいない。

一方、イギリスで教育を受けた男子のなかには、祖国の女性を求めめる者も多い。その方が、夫のいうことをよく聞き、家庭を守ってくれるからである。

当初、今回の回答者の年齢が、16歳から19歳までの生徒なのですべて独身かと思っていたが、すでに2人(8.3%)が結婚していた。年齢はいずれも18歳、イギリス生まれであり、アレンジド・マリッジによるものである。他の「回答なし」の1人を除き21人(87.5%)は独身である。この彼女たちに結婚するならアレンジド・マリッジがいいか、恋愛がいいかを尋ねると、アレンジド・マリッジが10人(47.6%)、恋愛が3人(14.3%)、「どちらでも構わない」が2人(9.5%)、「わからない」が4人(19.0%)、「回答なし」が2人(9.5%)であった。

アレンジド・マリッジが多いのは、日ごろから親によってアレンジド・マリッジが勧められているからだろうか。「どちらでも構わない」ということは、アレンジド・マリッジでも構わないととれ、そうなるとアレンジド・マリッジはもっと増える。イギリスで社会化された少女たちの間でも、親たちの祖国の文化が深く受け継がれていることが分かる。はっきり恋愛を選択したのは、既述の通り3人のみで、少ない。すでに結婚している者をのぞいても、低いパーセントである。

若者にとって結婚は、いわばもっとも自分の信条や理想を示すものである。イギリス社会で成長しながら、親たちの伝統や価値観が深く生きてい

るのは、本校が公立の学校とはいえ、最初に紹介したように大半の生徒が、バングラデシュ系で占められ、民族学校のような性格をあわせもっているからだろうか。先輩のなかに多くの者が、アレンジド・マリッジを選択していることにもよるだろう。

いずれにしても、今なお子どもたちのなかでも、西欧的価値とイスラーム的価値の違いを示す一例である。

5. 成人の調査にみられた動向

性別、出生地、滞在歴

成人の回答も合計 24 人である。ただしこの 24 人は、これまで考察の対象としてきた女子生徒の親たちとはまったく関係なく、地域もロンドンより特急で 1 時間半ほど離れているコベントリである。

性別の内訳は、男子 13 人 (54.2%)、女子 11 人 (45.8%) である。これを出身国別 (生まれ) でみると、バングラデシュが 8 人 (33.3%)、UK 6 人 (25.0%)、パキスタンが 10 人 (41.7%) である。UK と答えた者は、2 世以降の世代であり、バングラデシュやパキスタンと答えている者は、1 世である。

滞在期間は、3 年未満が 6 人 (25%)、4~5 年が 1 人、11~15 年が 3 人 (12.5%)、16~20 年が 1 人、21~30 年が 7 人 (29.2%)、31 年以上が 6 人 (25%) である。滞在期間が 3 年未満の者には、大学院の留学生が含まれる。成人の滞在期間の特徴は、留学生を除くと大半が 11 年以上であり、20 年以上の者も半分以上いる。

家庭内言語から祖国訪問の機会まで

成人からみた、バングラデシュ系やパキスタン系の家族員数の特徴はどうだろう。3 人が 6 人 (25%)、4 人が 8 人 (33.3%)、5 人が 3 人、6~8 人が 6 人、9~10 人が 1 人である。5 人以上が 10 人 (41.7%) と成人のデータからみても、家族員

数の多いのがわかる。祖父母は全員がいなかった。祖父母がいなくても家族員数が多いのは、子どもが多いからであろう。ただし家族形態からみると、留学生のみならず一般の家族も核家族の多いのが特徴である。インド亜大陸で今なお多い直系家族なり拡大家族は、多くの本でも紹介されている通りイギリス居住者のあいだでは少ないことが分かる。

成人どうしでの兄弟間の話し言葉は、英語が 9 人 (37.5%)、母語が 12 人 (50.0%)、英語と母語のミックスが 2 人、「回答なし」1 人である。滞在が長期化しても、兄弟どうしでは母語を使用している人が依然として多い。これをマルベリー女子学校の生徒の動向と比較すると、面白い傾向が読み取れる。

女子生徒が親と話すとき圧倒的に多いのは母語であり、兄弟どうしでの会話は英語だった。これが成人となると、兄弟どうしでも母語が多く、母語の使用頻度は年齢と生まれ (祖国かイギリスか)、さらに現在イギリスの教育機関で学習期間中か否かにも関係していることが分かる。成人の場合は、24 人中 17 人までがバングラデシュやパキスタンで生まれていたが、女子生徒では 21 人までがイギリス生まれであった。

さらに成人の両親や親類縁者との話し言葉をみると、英語だけというのはなく、母語が 22 人 (91.7%)、英語と母語のミックスが 2 人である。成人のなかでも親や同郷の者との会話には、母語が圧倒的に多く使用されているのがわかる。

祖国訪問の機会であるが、「よく訪問する」人は 13 人 (54.2%)、「訪問しない」人は 10 人 (41.7%)、「回答なし」が 1 人である。留学生の分を差し引くと、「よく訪問する」人と「しない」人とはほぼ半々ということだろう。マルベリー女子学校の生徒でも分かったことであるが、祖国とのつながりは成人の場合も強い。

イギリスでの生活の満足度

成人のイギリスへの満足度は、「不満」と答え

た人はなく、21人(87.5%)が「満足」しており、「場合によりけり」が2人、「回答なし」が1人である。成人の場合も、多くがイギリスでの生活に満足している。バングラデシュの大半がシルヘットという地方都市から来ている。また、パキスタンは、いまだに政情は不安定である。テロによる爆弾騒ぎも多い。こうした祖国の政治や経済の不安定性も、イギリスでの生活の満足度に関係しているだろう。

宗教、学歴、国籍

宗教は、生徒同様に全員がイスラームであった。移民コミュニティのなかでもイスラームの占める重要性がわかる。現在イギリスには、1000を超えるモスクがあるが、かれらにとってはモスクが生活の重要な一部になっていることが分かる。

教育レベルは、中卒が5人(20.8%)、シックス・フォームが2人、継続教育が5人、大学が9人(37.5%)、「回答なし」が2人、その他が1人である。大卒が多いのは、このなかに大学院の留学生が入っていることにもよる。中卒や、シックス・フォーム、継続教育でほぼ半数を占めるのは、いかにも移民労働者の特徴と思われる。

国籍は、イギリス国籍が14人(58.3%)、「回答なし」が2人、母国のままが8人(33.3%)である。二重国籍者は1人のみでバングラデシュとイギリスである。母国のままが多いのは、ここにも大学院の留学生が含まれているからである。それを除くと、大半の成人がイギリス国籍を取得している。近年、イギリス国籍を取得するには、英語の試験が課せられることになったが、これまでは旧植民地出身者には英国臣民の者も多く、かつイギリス滞在中の親から生まれた子は、イギリス国籍を取得することができた。イギリス国籍所得者が多いのは、こうした歴史的背景にもよるだろう。

成人の家庭内文化資本、購読新聞、衛星放送受信の可否

さて、成人の場合、家のなかの文化状況はどうであろう。家庭のなかに小説や雑誌のある者は、「いっぱいある」が6人(25.0%)、「そこそこにある」が5人(20.8%)、「少しある」が7人(29.2%)、「まったく無い」が5人、「回答なし」が1人である。「少しある」、「まったく無い」でほぼ半数になり、同一の質問に対する生徒の判断同様、基準に関してはたぶんに主観的なものを残してはいるが、成人の家庭の文化資本も移民労働者の場合、恵まれたものではない。

新聞を「毎日買う」者は4人(16.7%)、「ときどき」は9人(37.5%)、「まったく買わない」者も9人、「回答なし」が2人である。イギリスに宅配制度がないとはいえ、滞在20年以上になる者が半数以上を占めるのに、「まったく買わない」者と「ときどきしか買わない」者で4人に3人までを占めているのには、改めて驚く。街の小売店には、祖国の新聞も数多く販売されているが、あまり購入してはいない。定住移民労働者は、イギリスや祖国の情報をどうして入手しているのだろうか。それ以上に子どもたちは、活字文化への接触をどのような媒介物によってしているのだろうか。

今日、イギリスの移民コミュニティでは、どの出身国の人も衛星放送が受信可能である。かれらはしばしば、イギリスにいながらにして祖国の情報を衛星放送により入手している。そのため、コミュニティ内部で生活する者にとっては、英語を話さずとも生活が可能である。そうしたコミュニティ内部の若者には、2世、3世でもイギリス社会に背を向けコミュニティ内部の文化や宗教に閉じこもる者も少なくない。

05年7月に起きた、ロンドン地下鉄爆破事件の犯人とされるパキスタン出身の移民2世は、まさにそのような典型的な若者たちであった。イギリス政府が、近年、国籍取得に英語の試験を課し、イギリス文化への理解に関する最低限度の知識を

課したのもこうしたことが関っている。

成人にみる年齢の特徴と未既婚別

回答を寄せてくれた対象者の年齢に、16～20歳の者はいなかった。21～25歳が5人(20.8%)、26～30歳が5人、31～35歳が8人(33.3%)、36～40歳が2人、41～50歳が1人、51～60歳が1人、61歳以上が1人、「回答なし」が1人である。20代、30代に集中してしまっただが、マルベリー学校の生徒が全員20歳未満だったので、イギリスで生活している若い20代、30代の成人の意見が聞けたのは、それなりに意味がある。

これらの年齢層のうち、既婚者は15人(62.5%)、未婚が9人(37.5%)である。既婚者中、アレンジド・マリッジの人は9人(60%)であり、恋愛の人は6人(40%)である。調査実施中、アレンジド・マリッジの伝統の強いパキスタン人でも、高学歴者には恋愛結婚願望が強いと聞いた。

事実、本調査でも大卒は9人で既婚者6人中、5人までが恋愛である。高等教育は、その取得者に伝統的な価値や行動様式を相対化させる力を与えるが、この限られた調査でも何となく裏付けられた思いである。ただし、大卒でも未婚者3人は、いずれも結婚するならアレンジド・マリッジと答えている。結婚が現実的なものとなる前には、祖国の伝統的な結婚を望んでいるということだろうか。

全体でも未婚者のなかで結婚するならアレンジド・マリッジでしたい者は4人(44.4%)、恋愛結婚を望む者は3人(33.3%)、「回答なし」は2人である。1人の差とはいえ、成人でもアレンジド・マリッジを望む者の方が多かった。これは成人なら、なおのこととみるべきだろうか。

6. 調査から得られた女子中等生と成人の動向

以上、タワー・ハムレッツの女子生徒とコベントリーに住む成人との生活実態に関する簡単な動

向をみてきた。最後に総括的なコメントを付しておきたい。

生徒と成人で大きく異なったのは、家庭内コミュニケーション言語に関するもの、重国籍、祖父母との同居、本人の学歴などに関するものである。

家庭内言語は、生徒の場合、兄弟どうしは英語であった。しかし成人の場合は、たとえ兄弟どうしでも母語が多い。明らかに生徒たちはイギリスで教育されており、英語の方が流暢なのに対し、成人の場合は、母語の方が話しやすい差がある。

国籍に関しては、成人に留学生が含まれていたために、本国の国籍をそのままにしている者が含まれていた。そのため重国籍者は、少ない。一方、生徒の方には、重国籍者が結構含まれていた(生徒4人に対し成人は1人)。これは生徒の家族の方に、無理して国籍離脱を行わないままにしている者が多いことを占めている。これはどんな家族なのだろうか。次回に深めてみたいと考えている。

祖父母との同居は、成人家庭にはなく、生徒の家庭の方に多かった。これは成人家庭のなかに留学生がいることを差し引いても、成人の家庭の方ではすでに祖父母がなくなっているか、生徒の家庭の方に祖父母とともに祖国を離れて、イギリスで家族結合している者が多いことを示している。この点では、生徒の家庭がやがては成人の家庭に将来たどり着く、その前の姿であることも示している。

学歴の差も、成人家庭の場合は、留学生を除けば、移民労働者の典型的姿として、本国ではあまり教育を受けないままにイギリスに来ていることを示している。一方、生徒の方は、当然、シックス・フォームまで教育を受けている者が対象になっており、学歴が高くなっている。この差の背景には、祖国で社会化された者と、イギリスで社会化された者、すなわち世代の差も深く関わっている。

一方、生徒と成人で共通しているものは何か。ともに兄弟や家族員数が多いこと。両親との会話には、母語が多いこと、イギリスの生活に対する

満足度が高いこと、蔵書や新聞の購読に対する姿勢は、生徒の場合も家庭単位になるため、基本的には成人の家庭と同じような傾向を示すことなどである。

残念だったのは、生徒の年齢区分を細かく聞かなかったことである。16歳から19歳と一括しては、GCSE試験前か、試験後かの判断がつかない。質問紙調査と並行して、一部にインタビューも試みているので、おおよその推測はついているが、質問紙でもこれは分けて聞くべきであった。

また、祖父母との同居の有無は、生徒と成人ではかなり異なることにも注意すべきであった。10代の生徒の場合は、3世代同居の指標となるが、30代以上の成人にとっては祖父母との同居は限られており、むしろ重要なのは、両親との同居の有無の方であった。さらに数が限られており、イスラム以外の特に東欧圏の子どもの様子にまで及ばなかったことも、この時期には、ロマやカトリック教徒の子どもたちが続々とイギリスに来ていたときだけに惜まれる。これらに関しては、いずれ補っていくことにしたい。

注

- 1) 佐久間孝正、2007『移民大国イギリスの実験－学校と地域にみる多文化の現実』勁草書房。
- 2) 東欧圏統合後のイギリスの移民労働者の変化に関しては、Vertovec, S. 2006, *The Emergence of Super-Diversity in Britain*, Centre on Migration, Policy and Society, Working Paper No. 25, University of Oxford に詳しい。
- 3) イースト・エンドの歴史に関しては、Davies, A. 1990. *The East End Nobody Knows: A History, a Guide, an Exploration*. Macmillan を参照。
- 4) National Statistics. 2009. *Social Trends*. No. 39. p. 29. Palgrave Macmillan.
- 5) 近年イギリスでは、2001年の北部「暴動」や05年7月7日の地下鉄爆破事件以来、これまでの多文化政策をむしろ社会の「多分化」「多分解」を促進したとする見方が台頭している。これらの動きに関

しては、本稿と同時に書かれた「グローバル時代における政治と宗教－イギリスを中心に」『社会学研究』、特集「グローバル時代における政治と宗教」、東北社会学研究会、2011年3月刊の89号で扱っている。

- 6) 佐久間孝正、2011『外国人の子どもの教育問題－政府内懇談会における提言』勁草書房、116～118ページ。

*立教大学での勤務期間が、7年という短期間にも関わらず、本稿のもととなる半年の研究休暇を与えてくれた社会学部に感謝したい。特に、そのときの学部長だった木下康仁氏と現代文化学科のスタッフには心からお礼を申し上げる。

参考資料 当日配布の質問項目

Please circle the appropriate number in this questionnaire

- 1 Are you 1 male, 2 female ?
- 2 Where were you born ? 1 Bangladesh, 2 UK, 3 India, 4 Pakistan, 5 others (which countries ?)
- 3 How long have you been living in UK ? () years
- 4 How many brothers and sisters have you got ? Except you. ①2 brothers and sisters, ②3, ③4, ④over 5, ⑤none
- 5 How many members (including relatives) are there in your house. Including you. ①3 persons, ②4, ③5, ④6～8, ⑤9～10, ⑥over 11 persons
- 6 Are there any grand parents in your house ? ①yes, ②no
- 7 Which language do you speak with your brothers and sisters ? ①English, ②mother tongue, ③others ()
- 8 What is the language used mainly when you speak with your father, mother and Relatives ?

- ①English, ②mother tongue, ③others ()
- 9 If you have a grand parent, which language do you usually speak with them in your house ?
①English, ②mother tongue, ③others ()
- 10 Do you often visit Bangladesh (India, Pakistan, others)?
①yes, ②no
- 11 Are you satisfied living in Britain ?
①yes, ②no, ③so, so
- 12 What is your religion ?
①Islam, ②Hindu, ③Sikh, ④Buddhist, ⑤Christian, ⑥others, ⑦no religion
- 13 What is your academic background ?
①secondary school, ②sixth form, ③further education college, ④university, ⑤others, ⑥no academic background
- 14 Are you British or not ?
①yes, ②no
if you are not, what nationality do you have ?
()
- 15 Have you got dual nationalities ?
①yes, ②no
if yes, what nationality have you got besides British ?
(), (), ()
- 16 Are there any novels and magazines in your house ?
①yes, a lot. ②yes, but not so many. ③yes, but only a few. ④no, not at all.
- 17 If you have chosen ① or ② above, which language are they written ?
①English, ②mother tongue, ③both language, ④others ()
- 18 Do your family usually buy newspapers ?
①yes, every day, ②yes, sometimes, ③no, not at all
- 19 If you chose ① or, ② above, what language are

the newspapers written in ?

- ①English, ②mother tongue, ③both language, ④others ()
- 20 How old are you ?
①16 years~20 years, ②21~25, ③26~30, ④31~35, ⑤36~40, ⑥41~50, ⑦51~60, ⑧over 61
- 21 Are you married or single ? ①single, ②married
if you are single, which do you want a arranged marriage or love marriage ?
①arranged marriage, ②love marriage
if you are married, which is your marriage, arranged marriage or love marriage ?
①arranged marriage, ②love marriage, ③others ()

Thank you for your time and cooperation

Free opinion corner